

## 2-32-3 りょうげん 龍源院

### ①沿革

京都紫野の臨濟宗大徳寺の塔頭で、南派の法源地本院として、由緒の殊に深く、朱色の大徳寺山門の前に、厳然と位置している大徳寺中で最も古い寺である。

その名称も大徳寺の山号「龍寶山」の「龍」と、今日の臨濟禅でただ一つのみ存続している松源一派の「源」の両字よりなっている。

文亀二年（一五〇二）大徳寺の開祖、大灯国師より第八代の法孫である東溪宗牧禅師（時の後柏原天皇より特に仏恵大円禅師の号を賜わる。）を開祖として、能登（石川県）の領主であった畠山義元公、九州の都総督であった大友義長公（大友宗麟の祖父）らが創建した。

明治の初め頃、神仏分離によって現在大阪の住吉神社の内にあった往時の慈恩寺と、岐阜県高山城主金森長近公が大徳寺に創建した金龍院とを合併して、今日に至っている。

### ②建造物

#### 方丈（重要文化財）

室町時代の禅宗方丈建築として、その遺構を完全に留めているただ一つのもので、我が国の建築史上、最も枢要な存在である。方丈の棟瓦は、附玄関、表門の棟瓦とともに、京都八坂神社楼門の棟瓦と同じ室町時代最古の様式のものである。一重入母屋造、檜皮ぶき。

#### 附玄関（重要文化財、別に唐門ともいう）

方丈と同時代の建立で、我が国最古のもの、一重切妻造、檜皮ぶき。

#### 表門（重要文化財）

方丈・附玄関とともに同時代の建立である。四脚門切妻造、檜皮ぶき。

#### 庭園

方丈を中心として南庭、北庭、東の壺石庭、開祖堂前庭及び庫裡南軒先の各種庭園よりなっていて、見る者の自ら味わい、体得する真の「禅宗庭園」である。

#### 竜吟庭

方丈の北庭、室町時代特有の三尊石組からなる須弥山形式の枯山水庭園で、相阿弥の作と伝えられ、青々とした杉苔は、洋々と果てしない大海原を表わし、石組が陸地を表わしている。

中央に高く突出する奇岩が須弥山で（註＝仏説に、この世界は九つの山、八つの海からなっていて、その中心が須弥山）魏々として聳えたち、人間はもちろん、鳥も飛び交うことのできない、ただ一人として窺い知ることのできない、真実の自己本来の姿、誰もが本来そなえ持っている超絶対的な人格、悟りの極致を形容表現している。中央の須弥山石の前にある円い板石を遙拝石といい、この理想、目的に一步でも前進し、近づこうという信心の表われである。

## 東滴壺

方丈の東にある有名な壺庭で、我が国では最も小さく、底知れぬ深淵に吸い込まれそうな感じのする、格調高い石庭である。

一双

「龍源院リーフレット」より引用

※龍源院 京都市北区紫野大徳寺町八十二